第４節　須恵器生産と耕地開発

本節では、前節までに取り上げた須恵器生産上の技術的側面（窯体構造・焼成技術・須恵器編年）の評価で浮き彫りとなった安川天皇窯の成立背景を歴史的な事象を絡めて俎上に載せ、栃檀野窯跡群内における位置付け、さらに奈良時代末から平安時代初期に経営を確立し、窯跡群成立のもっとも大きな要因と旧来から指摘される東大寺領荘園の開発に焦点をあて、窯業生産と耕地開発の関係性について若干の考察を試みたい。

（１）栃檀野窯跡群について

栃檀野窯跡群の概要　窯跡群は、射水郡・婦負郡に隣接する位置にある。庄川扇状地の東側に古扇状地の段丘として残る芹谷野段丘から庄東山地にかけて分布し、総称して栃檀野窯跡群という。これまで計16遺跡で窯が確認されており、多くは平野に面する丘陵西側斜面に立地している。もっとも早く操業されたのは8世紀第2四半期といわれる宮森窯で、8世紀後半から9世紀にかけて生産が盛行し、10世紀頃に衰退期を迎えるとされる。

窯跡の分布　窯跡群は、南北の2つの支群により成っている。南北約2.0kmの範囲に窯跡が点在しており、北の増山支群、南の福山支群で構成される。増山支群は、段丘縁辺に数基存在するが、大半が山地に立地し、射水丘陵窯跡群域にまで食い込むように存在する。また、福山支群には著名な福山窯跡をはじめ、福山小堤窯、福山大堤窯、安川天皇窯で構成される。増山支群に比べ発見された窯跡数は少ない。安川天皇窯跡は、福山支群に含まれ、栃檀野窯跡群でもっとも南に位置している。

窯跡の立地　芹谷野段丘裾にある宮森窯を除いて丘陵斜面地に立地している。周辺は現在でも三助（さんすけ）焼などの窯業が盛んに行われており、良質の粘土と薪木の獲得が可能であることから、築窯条件の良い芹谷野丘陵一帯に須恵器生産地が選定されたものと思われる。また、窯跡群内には炭焼窯も多数発見されており、燃料材となる山林資源の用役問題と密接な関係を指摘することができる。

窯跡の時期別分布　増山支群の宮森窯と福山支群の安川天皇窯がもっとも古く8世紀第2四半期～中葉に位置づけられ、8世紀第3四半期から第4四半期にかけて増山支群の増山亀田窯、増山団子地窯、増山妙覚寺坂窯が操業を始め、同時期には福山支群で福山窯、福山小堤窯、福山大堤窯が操業している。9世紀前半に入ると、小丸山1・2号窯が操業され、9世紀後半から10世紀にかけて正権寺後島窯、増山外貝喰山窯、増山笹山窯、東笹鎌野窯が操業をし、以後栃檀野窯跡群では須恵器生産が衰退する。

支群	遺跡名	種別	時代	編年
増山支群	安川天皇窯	窯	奈良	8c2/4-3/4
	福山1号窯	窯・製鉄	奈良	8c3/4
	福山2号窯	窯	奈良	8c3/4
	福山小堤窯	窯	奈良	8c3/4-4/4
	福山大堤窯	窯	奈良	8c3/4-4/4
増山支群	宮森窯	窯	奈良	8c2/4
	増山団子地窯	窯	奈良・平安	8c3/4
	増山妙覚寺坂窯	窯	奈良・平安	8c3/4-4/4
	増山亀田窯	窯	奈良・平安	8c2/4-4/4
	増山池ノ平等窯	窯	奈良・平安	9c?
	小丸山1号窯	窯	平安	9c1/4-2/4
	小丸山2号窯	窯	平安	9c1/4-2/4
	増山外貝喰山窯	窯	奈良・平安	8c3/4-4/4
	増山赤坂窯	窯	平安	9c3/4-
	増山外法蓮山窯	窯	平安	9c4/4?
	増山笹山窯	窯	平安	9c4/4-10c1/4
	正権寺後島窯	窯	平安	9c4/4-10c1/4
	東笹鎌野1号窯	窯	平安	9c4/4-10c1/4
	東笹鎌野2号窯	窯	平安	10c2/4-3/4?
	計19基（福山支群5、増山支群14）			

Tab.15　栃檀野窯跡群　窯跡一覧

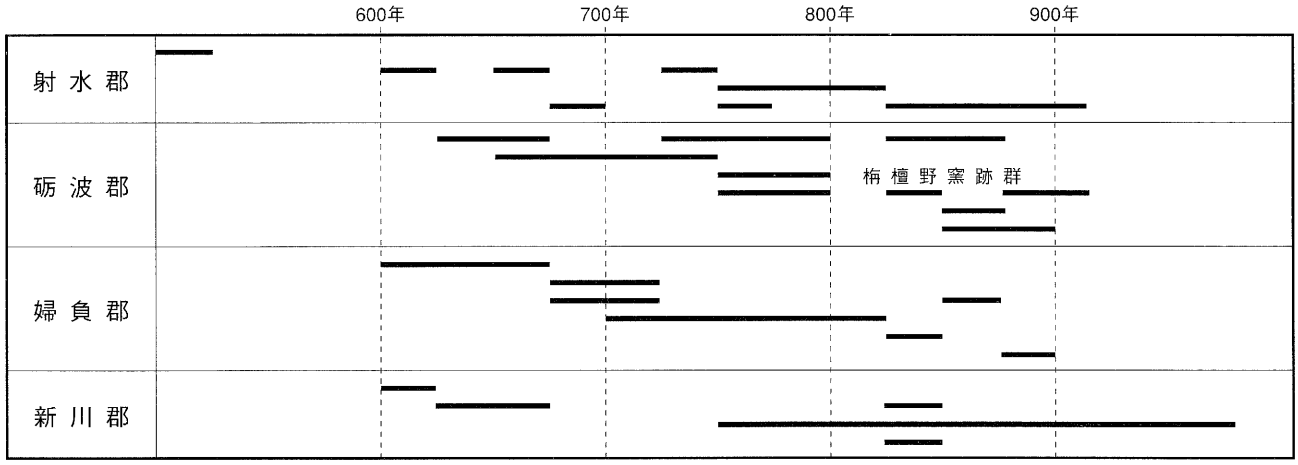
（２）砺波郡における須恵器の生産と流通（Fig.26）

一郡一窯的体制　栃檀野窯跡群が成立した8世紀後半は、「一郡一窯的」体制という律令的土器生産体制、つまり須恵器と土師器の一体生産が確立する時期にあたる[i]。この窯業上の画期は、律令国家の経済政策と連動するものであり、古代前半期（7世紀初頭から9世紀初頭）の手工業生産政策は行政単位ごとの集約的な手工業センターを作ることを目指した。砺波郡では、小矢部川左岸の安居・岩木窯跡群において7世紀前半から須恵器生産を始めており[ii・iii]、その後7世紀後半から窯場が増加し、8世紀代には小矢部川左岸や芹谷野段丘上に窯跡群が展開する。それまで小矢部川左岸に生産域が集中していたが、突如として砺波平野東部に窯場が作られる。続いて丘陵地帯である松永窯跡群に窯場が集約されており、西井氏は須恵器とともに瓦を焼成している点に注目し、「郡衙（評衙）や駅馬の設置」との関連を示唆している。

i　北野博司 1994「総論」『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会

ii　池野正男氏は、砺波郡における須恵器生産開始期を7世紀第2四半期とされる。池野正男 1988「越中における須恵器生産の概要」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』（報告編）石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

iii　上野 章 2003「3　安居窯跡群」『富山県ボランティア埋蔵文化財保護活動事業発掘体験講座　婦負郡婦中町勅使塚古墳・中新川郡上市町永代遺跡・東砺波郡福野町安居窯跡群・射水郡小杉町中山中遺跡発掘調査報告』（財）富山県文化振興財団



Tab.16　越中における郡別の須恵器窯操業期間（宇野隆夫1994より転載）

小矢部川左岸の窯跡群　現在の小矢部市域には、松永窯跡群、平桜岡山窯跡群、松尾窯跡群、谷内窯跡群の4つの窯跡群が存在する。これまでは松永・埴生窯跡群（松永、松尾、谷内）と平桜岡山窯跡群に分けられているが、小矢部市史にもとづき、松永・埴生窯跡群を以下のように分けて記述した。また、松永・埴生窯跡群の南東約7kmには、南砺市域に安居・岩木窯跡群がある。

松永窯跡群　小矢部市の西域にあり、砺波山丘陵の東麓に分布する西蓮沼窯跡、山王奥堤窯跡、蓮沼新堤窯跡、長窯跡、松永窯跡の7基で構成される[i]。西蓮沼窯が最も早く操業されており、7世紀第3四半期に位置付けられる。蓮沼新堤窯跡では、灰原から須恵器と軒丸瓦（単弁八葉蓮華文）、丸瓦（行基葺式、無段）、熨斗瓦が出土しており、7世紀末頃と見られる。山王奥堤窯、蓮沼新堤窯、長1号・2号窯、松永1号・2号窯は、西蓮沼窯に後続しいずれも8世紀前半の操業と考えられる。

平桜岡山窯跡群　小矢部市の南部、蟹谷丘陵北側に分布し、1号窯から6号窯までの6基で構成される。3号・5号窯の2基が発掘調査されている[ii]。3号窯は、全長約8.2mの半地下式無断無階の窖窯であり、床面に複雑な排水施設をもつ。

松尾窯跡群　小矢部市西部の砺波山丘陵東端、渋江川の支流膿川と利波川の間にある丘陵先端部に立地し、2基の窯で構成される。南側にもう1基の窯が存在する可能性も考えられる。7世紀末の山王奥堤窯や蓮沼新堤窯、8世紀初頭の松永Ⅱ窯の須恵器に似ることから、8世紀を前後する時期と考えられている。平瓦と丸瓦が出土しているが、供給地は明らかでない。

谷内窯跡群　小矢部市西部の埴生谷内地内にあり、1号・2号の2基で構成される。2号窯の発掘調査が行われており、8世紀初頭頃の遺物が出土している[iii]。

安居・岩木窯跡群　医王山から延びる蟹谷丘陵の東側斜面地に7～9世紀にかけて計16基の窯が確認されている[iv]。大きく2つの支群で構成され、北の安居支群では安居ロノ部窯、安居大堤窯、安居中野山窯があり、南の岩木支群では岩木北谷窯3基[v]、岩木中宮谷窯1基、岩木尻広谷窯1基がある。

安居支群　安居ロノ部窯は、富山県文化振興財団により発掘調査が行われ2基の窯を確認している。1号窯は、地下式で推定全長11.5mを測り、「窯尻に送風排煙調整用の溝」が伴う可能性があり、7世紀前半から後半に位置づけられる。安居大堤窯では、マリーナ造成に伴い調査されており、1.5mの間隔で並存する2基の窯を検出している。未報告のため詳細は明らかでないが、いずれも規模は全長8～10m、幅1.2～1.5m、高さ1.2mを測る。2号窯の床面には、焚口付近から前庭部の窯壁に沿って溝1条を検出しており、焚口付近でT字に直交する[vi]。遺物から8世紀第3四半期と考えられる。安居中野山窯は3基から成り、2号窯では「窯が焼かれたのち、窯体側部を破壊して製品あるいは残存土器片を掻き出した」痕跡らしき断面状況を確認している[vii]。3基ともに8世紀中葉頃と報告されている。

i　西井龍儀他　2002「松永窯跡群」『小矢部市史　おやべ風土記編』小矢部市史編纂委員会

ii　小矢部市教育委員会 1981『富山県小矢部市 平桜岡山3号窯跡』

iii　伊藤隆三 1994「Ⅳ　谷内窯跡群発掘調査概報」『平成5年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報』小矢部市教育委員会

iv　上野 章 2003「3　安居窯跡群」『富山県ボランティア埋蔵文化財保護活動事業発掘体験講座　婦負郡婦中町勅使塚古墳・中新川郡上市町永代遺跡・東砺波郡福野町安居窯跡群・射水郡小杉町中山中遺跡発掘調査報告』（財）富山県文化振興財団

v　岩木北谷3号窯は、「瓶焼谷窯」として知られる窯。

vi　林浩明氏のご教示による。

vii　安念幹倫・山森伸正・林浩明 1985「安居・岩木窯跡における新資料の紹介Ⅱ」『大境』第9号　富山考古学会

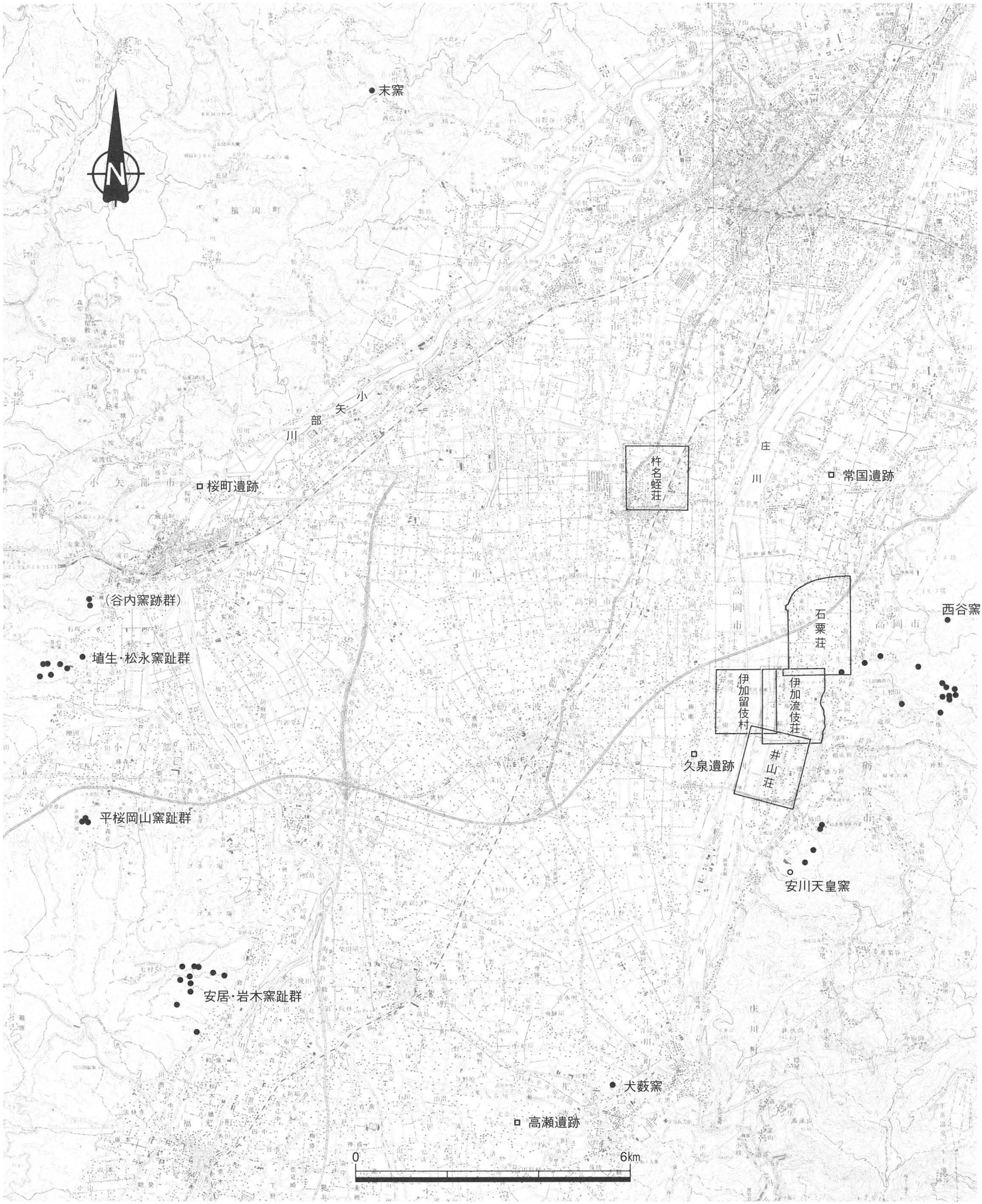


Fig.25　砺波郡内の須恵器窯の分布と東大寺領荘園（scale＝1/100,000）

この図は国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。（承認番号）平16北複第101号

※東大寺領荘園の位置については、金田章裕・田島公1996「6越中　a越中国砺波郡東大寺領荘園図」『日本古代荘園図』東京大学出版会に基づいている。

窯群	窯名	時期	器種構成 杯	椀	盤・皿	高杯	仏器類 鉢	鉢	稜椀	椀	円面硯	調理具 鉢	煮沸具 甑	鍋	甕	貯蔵器 はそう	壺	提瓶	台付甕	瓶	平瓶	横瓶	甕	備考
梅檀野窯跡群	安川天皇窯	8c2/4-3/4	●					●							●		●					●	●	瓦塔、土馬、円面硯、猿面硯、水瓶、双耳杯、土鈴が出土。
	福山1号窯	8c3/4	●	●?	○			○			●			●	●		●	●		●		●	●	射水丘陵の天池窯跡群や蟹谷丘陵の平桜岡山窯跡群の後続時期。加賀の浅川3号窯と同時期か。
	福山小堤窯	8c3/4-4/4	●												●								●	
	福山大堤窯	8c3/4-4/4	●												●							●	●	
	宮森窯	8c2/4	●														●						●	水瓶?出土。小杉No.16遺跡1・2号窯と近い時期。
	増山団子地窯	8c3/4	●		●	●			●						●		●					●	●	
	増山妙覚寺坂窯	8c3/4-4/4	●						●					●	●							●	●	
	増山亀田窯	8c2/4-4/4	○		○				○								○		○			○	○	蓋のみ8c前半の様相を呈す。
	増山池ノ平等窯	9c?	●																					
	小丸山1号窯	9c1/4-2/4	●														●			●			●	
	小丸山2号窯	9c1/4-2/4	●																	●			●	双耳瓶
	増山外貝喰山窯	8c3/4-4/4	●														●						●	小丸山1・2号窯に先行か?
	増山赤坂窯	9c3/4～													●		●			●			●	双耳瓶
	増山外法蓮山窯	9c4/4?	●	●										●	●		●			●			●	双耳瓶
	増山笹山窯	9c4/4-10c1/4	●	●	●									●			●			●			●	双耳瓶
	正権寺後島窯	9c4/4-10c1/4	●	●																●			●	
	東笹鎌野1号窯	9c4/4-10c1/4	●	●			◐							●						●			●	双耳瓶
	東笹鎌野2号窯	10c2/4-3/4?	●	●																				
松永窯跡群	西蓮沼窯	7c3/4～	●																		●		●	(松永1号窯)。群内で初期操業。
	蓮沼新堤窯	7c4/4	●		●	●																		(松永2号窯)。軒丸瓦・丸瓦出土。
	山王奥堤窯	7c4/4?																						(松永3号窯)。丸瓦。
	長1号窯	8c1/4-2/4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—	—	—	—	—	(松永4号窯)。
	長2号窯	8c1/4-2/4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—	—	—	—	—	(松永5号窯)。
	松永1号窯	8c1/4-2/4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—	—	—	—	—	(松永6号窯)。
	松永2号窯	8c1/4-2/4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—	—	—	—	—	(松永7号窯)。
松尾窯跡群	松尾1号窯	7c4/4-8c1/4	●	●																				平瓦・丸瓦出土。
	松尾2号窯	—																						
谷内窯跡群	谷内1号窯	8c1/4	●										●				●						●	
	谷内2号窯	8c1/4																						
平桜岡山窯跡群	平桜岡山1号窯	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	平桜岡山2号窯	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	平桜岡山3号窯	8c3/4	●		●				●								●		●				●	有台杯に佐波理鋺の模倣品あり。
	平桜岡山4号窯	8c3/4	●		●												●		●				●	
	平桜岡山5号窯	8c3/4	●		●	●			●								●		●				●	
	平桜岡山6号窯	7c3/4-7c4/4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
安居窯跡群	安居ロノ部い1号窯	7c1/4-2/4	●			●				●		●			●	●	●				●		●	安居窯跡群には、現在16基の窯が確認されている。
	安居ロノ部い2号窯	7c2/4-3/4	●			●						●			●		●		●		●	●	●	陶棺、土錘、土馬、硯
	安居大堤1号窯	8c3/4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	安居大堤2号窯	8c3/4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	環状台付瓶が出土。
	安居中野山1号窯	8c2/4-3/4	●									●					●						●	
	安居中野山2号窯	8c2/4-3/4	●														●							
	安居中野山3号窯	8c2/4-3/4	●									●											●	
	安居中野山4号窯	—	●																			●		
	岩木北谷1号窯	8c3/4-4/4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	岩木北谷2号窯	8c3/4-4/4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	岩木北谷3号窯	8c2/4-3/4	●									●			●		●			●				瓶焼谷(ビンヤキ谷)窯。平桜岡山3号に後続か?
	岩木中宮谷窯	8c3/4-4/4	●																					岩木北谷3号に後続か?
	岩木尻広谷窯	8c1/4-2/4	●														●							松永1・2号(6・7号)窯と同時期。広口壺に「公四位尼」のヘラ書きあり。
—	犬藪窯	9c1/4-2/4	●											●	●					●		●?	●	円面硯?出土。
—	百楽田窯	9c1/4-2/4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
—	末窯	9c3/4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

＊●…窯体出土、○…窯体外（灰原等）で出土。窯体内外不明のものは●とした。
＊○世紀前半（後半）とある時期は、○c1/4-2/4（3/4-4/4）とした。中葉とある時期は、○c2/4-3/4とした。
＊時期および器種構成については、市史・報告書・論文等に拠っている。
＊松尾窯跡群には2基の窯跡が発見されており、便宜上「1号窯」・「2号窯」としている。

Tab.17　砺波郡内における窯跡出土須恵器の器種構成

編年軸			須恵器窯跡群						消費遺跡
時期	期	小期	暦年	松永・埴生	平桜岡山	安居・岩木	梅檀野	単独窯	
前半期	Ⅰ	Ⅰ1	7c1/4						桜町SB25
		Ⅰ2				安居ロノ部1号(に号?) 安居ロノ部2号(い2号)			
	Ⅱ	Ⅱ1		西蓮沼 山王奥堤、蓮沼新堤					桜町横穴墓
		Ⅱ2							
		Ⅱ3	8c1/4	松永2号 埴生谷内1号、2号		岩木尻広谷			
	Ⅲ		8c2/4	松永1号、長2号			宮森		
	Ⅳ	Ⅳ1	8c3/4		平桜岡山3号 平桜岡山4号,5号	安居大堤 岩木北谷(瓶焼谷) 岩木中宮谷	安川天皇 福山、増山団子地		
		Ⅳ2(古)				安居中野山2号,3号	増山妙覚寺坂		高沢島Ⅱ
		Ⅳ2(新)	9c1/4						
後半期	Ⅴ	Ⅴ1				ぐみ谷奥	小丸山1号、2号		
		Ⅴ2						犬藪、百楽田(館)	高瀬(石仏、穴田)
	Ⅵ	Ⅵ1	9c3/4				増山笹山	末	
		Ⅵ2							
		Ⅵ3	10c1/4						
	Ⅶ	Ⅶ1							
		Ⅶ2(古)							
		Ⅶ2(新)							

Tab.18　砺波郡の須恵器窯編年

※西井龍儀1988「砺波郡の概要」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』の編年表を加除修正。

岩木支群　安居支群に南接し、岩木北谷窯3基、岩木中宮谷窯１基、岩木尻広谷窯１基の計5基の窯で構成される。発掘調査が行われた窯はなく、すべて表採資料による[i]。岩木北谷窯は、安居大堤窯と尾根一つ隔てた南谷奥にある溜め池岸で1・2号窯が発見され、その西約200mに「瓶焼谷窯」として周知の3号窯がある。3号窯は、8世紀中葉後半に位置付けられる。岩木中宮谷窯は、岩木北谷窯の尾根を越えた南谷にあり、南斜面に立地する。8世紀後半の窯と考えられる。岩木支群の中でもっとも操業が早いのは、岩木尻広谷窯である。窯は、安居・岩木窯跡群中で最南に位置する。惜しくも賛同新設工事により破壊され、現在は熱を受け赤化した地山が残るのみである。岩木尻広谷窯では肩部に「公四位尼」と判読できる箆書文字が施された広口壷が見つかっており、松永6・7号窯とほぼ同時期の8世紀前葉と考えられる。

i　西井龍儀 1988「安居・岩木窯跡群の概要」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』（資料編）　石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

単独窯　郡内には単独的に存在する窯が数基見つかっている。窯跡群を構成しないのは、周辺の詳細調査が行われていないことに起因する可能性もあり、いずれも偶発的な発見による。9世紀第2四半期の犬藪窯[ii]、9世紀第3四半期の百楽田窯跡[iii]、そして9世紀末から10世紀初頭にかけての末窯である。犬藪窯は、八乙女山裾野の丘状台地末端部に位置し、比較的平坦地にある。郡内の窯場は総じて丘陵縁辺部や斜面地に選地しているが、犬藪窯は低地に立地している。同じ低地での窯造成としては、婦負郡の栃谷南遺跡が挙げられる[iv]。栃谷南遺跡は、境野新扇状地扇端部に形成された水田地帯のほぼ中央部に立地する。犬藪窯の東約2kmには大学寮墾田地（勧学田）や東大寺領荘園（杵名蛭荘）の荘所とされる高瀬遺跡があり、時期的に近いことから供給地（消費地）の可能性も考えられる。

ii　岩倉節郎・上野章 1985「井波町犬藪遺跡出土遺物の紹介」『大境』第9号　富山考古学会

iii　かつて館窯とされていた窯。

iv　鹿島昌也 2002「Ⅰ 遺跡の位置と環境」『富山市栃谷南遺跡発掘調査報告書Ⅲ』富山市教育委員会

窯場の変遷と分窯の動き　砺波郡では砺波平野の西部と東部に流れる小矢部川と庄川によって、小矢部川左岸と庄川右岸の窯跡群に大別できる。小矢部川左岸では7世紀代に操業を開始する安居・岩木窯跡群が郡内における須恵器生産の初現とみられる。同窯跡群では安居大堤窯、岩木尻広谷窯など8世紀代に最盛期を迎え、9世紀中葉のぐみ谷奥窯まで長期間にわたる生産が行われている。また、松永・埴生窯跡群ではやや遅れて7世紀後半に須恵器生産を始め、8世紀初頭に隆盛をみる。しかし、それ以後に継続して生産されず、南に位置する平桜岡山窯跡群では8世紀中葉から後半に集中的に操業することから、窯場の移動と捉えることができる。小矢部川左岸域は、古代北陸道の「砺波の関」の比定地とされるところであるとともに、前方後円墳・方墳等で構成される安居古墳群や、松永・埴生周辺の谷内16号墳や若宮古墳等に代表されるように畿内文化伝播の玄関口とも言うべき地である。松永窯跡群の蓮沼新堤窯跡では、灰原から7世紀末頃の須恵器と軒丸瓦（単弁八葉蓮華文）、丸瓦（行基葺式、無段）、熨斗瓦が出土している。郡内に瓦を生産する窯が他に見られないことから、供給地として寺院や末端郡衙的施設が同窯跡群の近隣に存在する可能性があり、西井氏は「郡衙（評衙）や駅馬」の存在を推定している。木倉豊信氏は、越中国の古代8駅中の坂本駅を小矢部市の「坂又」であろうとし、その位置を小矢部川右岸の子撫川との合流付近と推定された[i]。その推定地に程近い桜町遺跡では和同開珎や『和名類聚抄』の長岡郷もしくは『延喜式』神名帳にある長岡神社に関係する墨書土器が出土している[ii]。また、7世紀第2四半期に須恵器生産を始めた安居・岩木窯跡群の周辺は、養老2年（718）の開基と伝える古刹安居寺（あんごじ）や、養老3年（719）に泰澄大師による開山伝承の残る医王山がある。

荘園開発が活発化する8世紀中葉までは小矢部川左岸が郡内における窯業生産の中心地であり、供給地もその周辺に限定されていたものと思われる。砺波平野東部に東大寺領荘園が造営されると庄川右岸に須恵器窯が作られるようになる。栴檀野窯跡群が操業していた頃、平桜岡山窯跡群や安居・岩木窯跡群でも引き続いて須恵器生産を行っており、郡内における分窯ともいうべき様相を呈す。一群一窯体制が完成期を迎える8世紀中葉頃に、それまでほとんど須恵器生産を行っていない地域に突如として窯が作られる背景には、郡司・国司が介入する有力社寺の墾田地開発という社会情勢に起因するものと理解したい。

i　木倉豊信 1957『越中史壇 第10号 —特集富山県の交通研究—』越中史壇会

ii　小矢部市教育委員会 2004『富山県小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書　弥生・古墳・古代・中世編Ⅰ』

（3）東大寺領荘園と栴檀野窯跡群

東大寺領荘園　栴檀野における須恵器生産の背景には、東大寺領荘園の経営が大きく起因することがこれまで先学により指摘され、一般論化している。現存する荘園絵図や文献資料から、窯跡群の操業と荘園開発は時期的に符合し、荘園比定地として芹谷野段丘縁辺に石粟（いしあわ）荘・伊加流伎（いかるぎ）荘・井山（いやま）荘の3荘が展開したとの説が有力となっている。また、杵名蛭（きなひる）荘は、現在の高岡市戸出付近に比定される。

時代背景　砺波郡内における東大寺領荘園の成立と深く関わる利波臣志留志（となみのおみしるし）は、中央政界に対する地方豪族の位階昇進手段を駆使し、律令体制確立期という時代の波に乗って立身出世を果たす。天平19年（747）9月2日に河内国の河俣連人麻呂とともに盧舎那仏鋳造の知識として米3,000碩（石）を献納し、無位から外従五位下を叙位された。後に天平神護元年（765）3月20日に墾田100町を献上、従五位上に昇叙し越中員外介[iii]に任じられている。

天平15年（743）5月27日、盧舎那仏造立の詔発布の4ヶ月前に墾田永年私財法が制定されたが、これは国家的大事業を控え在野の寄進行為を期待しての貴族・地方豪族への優遇措置との見方もある[iv]。この法令を利用し、利波臣本宗家とは傍流である志留志が100町の墾田私有を認められ、立身出世を果たしたのである。

伊加流伎荘（いかるぎ）　志留志が東大寺に寄進したのち、砺波郡では天平感宝元年（749）に伊加流伎荘が占地される。この時点で郡内の東大寺領は本荘のみである。「越中国諸郡荘園惣券第一」（天平宝字3年11月14日（759））に「以前、去天平勝宝元年占定野地」とあり、占地の10年後に惣券が作成されたことがわかる。この占地は天平感宝元年（749）の聖武天皇の寺院墾田地許可令に基づくとされ、河合久則氏は「勅施入」により成立したと推察されている。

石粟荘（いしあわ）　大治5年（1130）の「東大寺諸国庄々文書并絵図等目録事」にある「天平宝字元年12月18日勅旨越中国砺波郡百二十町」とあるのは、石粟荘のこととされる。伊加流伎荘の初見資料である惣券に記載がないことから、他の東大寺領荘園とは成立を異にすると考えられる。また、「官施入田」とあり、これは橘奈良麻呂の地が政府を通じて東大寺へ施入されたことを意味する。藤井一二氏は、この「東大寺諸国庄々文書并絵図等目録事」の中の「天平宝字元年12月18日勅旨　越中国砺波郡百二十町」が石粟荘であることを指摘している[v]。

iii　国司の定員外の次官（介）

iv　河合久則1990「四、利波臣志留志について」『砺波市史資料編1　考古 古代・中世』砺波市史編纂委員会

v　藤井一二 1981「日本古代庄園の成立と開発—越中国石粟庄を中心にして—」『金沢経済大学経済開発研究所研究年報』創刊号

時代	西暦	年号	東大寺領荘園に関連する出来事	福山支群				増山支群											
				安川天皇窯	福山窯	福山小堤窯	福山大堤窯	宮森窯	増山団子地窯	増山妙覚寺坂窯	増山亀田窯	小丸山一号窯	小丸山二号窯	増山外貝喰山窯	増山赤坂窯	増山外法蓮山窯	増山笹山窯	正権寺後島窯	東笹鎌野一号窯	東笹鎌野二号窯
奈良時代	743	天平15	墾田永年私財法 発令																
	746	天平18	大伴家持,越中国守赴任 (～天平勝宝3(751)まで)																
	747	天平19	礪波臣志留志が東大寺盧舎那仏鋳造の知識として米3000碩を献上																
	749	天平感宝元	東大寺占墾地使僧平栄,越中派遣.伊加流伎野を占定(伊加流伎荘成立)				東	大	寺	領	荘	園	の	成	立				
			聖武天皇の花厳供田勅願(杵名蛭荘成立)																
	757	天平宝字元	橘氏墾田地を東大寺へ施入（すでに石粟荘成立）																
	759	天平宝字3	越中国礪波郡伊加流伎開田地図(＊未開状態) 越中国礪波郡石粟村官施入田地図																
			この間に志留志地が井山荘となる.(井山荘成立)																
	767	天平神護3	志留志,越中員外介 従五位上に昇叙さる. (100町の墾田献上)																
	767	神護景雲元	越中国東大寺墾田并野地図(井山・伊加流伎・杵名蛭)　志留志－専当国司																
	779	宝亀10	志留志,伊賀守に任命さる.																
平安時代	800																		
	900																		
	950	天暦4	越中国東大寺領荘園が荒廃 東大寺寺用帳に杵名蛭荘・井山荘の記載なし. 伊加流伎荘100町, 石粟荘120町と記載																
	1000																		
	1100																		
	1130	大治5					徳	大	寺	家	領	般	若	野	荘	の	成	立	
	1186	文治2	般若野荘が内大臣徳大寺実定の家領となる																

Tab.19　東大寺領荘園（井山荘・伊加流伎荘・石粟荘・杵名蛭荘）と栫檀野窯跡群

井山荘　神護景雲元年（767）、志留志は墾田100町を東大寺に寄進し越中員外介となり、従五位上に昇叙した。このときの寄進地が、東大寺領井山荘となる。この井山荘は天平宝字3年（759）の伊加流伎荘開田地図の南端に「利波臣志留志地」とあり、神護景雲元年（767）11月16日付けの伊加留伎村（伊加流伎村）開田地図の端には「南同寺墾田地井山村」とあるので、8年の間に志留志の地が井山荘となったことを示している。

須恵器窯成立と荘園開発　栴檀野窯跡周辺には、東大寺領荘園の3荘が比定地として存在する可能性があることは先述した。荘園成立期と栴檀野窯跡群の本格的な操業開始時期はともに8世紀中葉段階であり、須恵器生産展開の直接的原因を律令体制下の荘園開発に求めざるを得ない状況である。小矢部川左岸域から分窯して芹谷野段丘周辺に須恵器窯が突如として作られる背景には、墾田地化を契機として郡司を超越した行政力が介在したとする見方もある[i]。須恵器供給地と荘園比定地が確定しない限り推論の域を出ないが、須恵器生産と荘園制に伴う耕地開発には密接な関わりがあることは想像に難くない。同じくその成立に東大寺領荘園との関係性が指摘されるものに、新川郡の東大寺領大荊荘と立山町上末窯がある[ii]。東大寺領大荊荘は、立山町浦田から舟橋村古海老江付近に比定[iii]され、上末窯は8世紀後半から10世紀中頃まで操業している。

山田真一氏は、松本市北東縁に8世紀末から9世紀前葉に盛期をみる大規模な須恵器窯跡群と窯業生産に係わる集落が展開することを提示し、窯業生産をはじめとする手工業生産が政治体制（権力機構）にとって基幹的産業であり、その後押しによる急激で大規模な開発が可能であったことが窯業生産による土地開発の最大の特質であるとの論を展開している[iv]。栴檀野窯跡群においても集約的に窯が造成されており、その背景には手工業生産を支える集落が存在していたと考えられる。そのような集落はまだ見つかっていないが、8世紀中葉以降、平野部および段丘上には千代、徳万、宮新、正権寺、高沢島Ⅱ、太田、久泉、秋元窪田島、高道向島、宮村、小杉等の各遺跡が出現する。奈良時代以前に平野部における集落の展開はこれまで未確認であり、もし存在するとしても小規模な集落であったと思われる。久泉遺跡では、幅7mに及ぶ大規模な溝（SD09）が検出されている。これは集落が立地する微高地の比較的高い箇所を南北に縦断することから人工的に掘削された溝と判断でき、時代は未確定であるが古代の灌漑技術の高さを示すものと推定している。この溝は、磁北から東に約45度振って流れており、下流には伊加流伎村の比定地がある。この溝の開削時期が荘園開発期と同じだとすると、高度な灌漑技術を得たことを足がかりとして、給配水の難しい扇状地扇央部へ集落が進出したことの証左と見ることはできないだろうか。また、窯跡群と分布範囲を同じくして製鉄遺跡も広がりをみせる。とりわけ増山周辺には、増山製鉄遺跡群として小丸山、金クソ山遺跡が知られる。金クソ山遺跡では、大量の鉄滓や炉壁が見つかっている。操業年代については、炭焼窯の焼土ピットから底部に回転糸切り痕を残す土師器が出土していることから9世紀以降とみられるが、製鉄遺構調査の進んでいる射水丘陵と比較すると奈良時代前半との見方も可能であるという。

《栴檀野窯跡群の形成過程》

〔状態〕	〔要　因〕
未開地	小矢部川左岸における
↓	須恵器生産
須恵器生産の開始	東大寺領荘園の成立
（8c前～中頃）	（水利施設の確保）
↓	
須恵器生産の拡大	東大寺領荘園の展開
（8c後半～9c）	（未墾地の開墾）
	平野部の遺跡増加
↓	
須恵器生産の衰退	東大寺領荘園の衰退
（10c）	中世般若野荘の成立

福山窯の特異性　栴檀野窯跡群中にあって、もっとも古くからその存在が知られる福山窯からは、市指定文化財ともなっている瓦塔、円面硯、土馬をはじめ、猿面硯、水瓶、双耳杯、土鈴が出土しており、他の窯とは器種構成上一線を画す様相を呈する。器種構成についての詳細は前節に譲るが、福山窯にみられる焼成器種の差別化は日常什器類を主生産とする他の窯とは供給先の遺跡の種類・階層差、または製品を発注する側の違いと捉えることができよう。仏教的影響の強い瓦塔や鉄鉢、稜椀、水瓶を焼成していることから、荘園管理者などの政治的有力層もしくは寺院などの仏教関連施設への供給があったのかもしれない。

i　西井龍儀 1994「利波郡における分窯とその背景」『北陸古代土器研究』第4号　北陸古代土器研究会

ii　宇野隆夫 1989「第2章 上末窯の立地と歴史的環境」『越中上末窯』富山大学人文学部考古学研究室

iii　藤田富士夫 1998「東大寺領大藪荘の現地比定と遺跡」『森浩一70の疑問　古代探求』中央公論社

iv　山田真一1996「窯業生産と古代の土地開発―松本市北東縁における様相―」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告第7集』

正友ヤチヤマ窯と安川天皇窯　能登地方の高松・押水窯跡群（河北窯跡群）中に8世紀中葉段階の正友ヤチヤマ窯がある。西井氏がかつて安川天皇窯資料について「石川県押水町正友ヤチヤマ1号窯に極めて酷似する」ことを見出し、「杯Bのみならず杯B蓋の諸特徴も似ており、窯体構造も地下式窖窯となるなど共通性が多い」と指摘、「須恵器工人の技術連携や移動、その管理者の背景など」の課題を提示した。今回の報告作成にあたり、正友ヤチヤマ窯資料が保管されている財団法人石川県埋蔵文化財センターに安川天皇窯資料を持ち込み、比較実見を試みた。西井氏の指摘を半ば覆そうとの意気込みで乗り込んだが、資料で見る限り、氏の先見性に感服しきる結果となった。両窯資料の共通点は前節で福沢が報告する通りであり、窯体構造や焼成技術にも技術的系譜を追うことができる可能性を示した。近縁性をもって直ちに正友ヤチヤマ窯と結びつけるのは短絡との批判もあろうが、8世紀段階の越中における安川天皇窯の特異性を鑑みたとき、敢えてその関係性について触れざるを得ない。

正友ヤチヤマ窯、安川天皇窯が操業する8世紀中葉（田嶋編年Ⅳ1期前半）という、時期の問題がある。能登国は養老2年（718）に越前国から羽咋・能登・鳳至・珠洲の四郡を分離して立国されるが、天平13年（741）には越中国に下る。天平勝宝9年（757）、再び独立する。8世紀中葉の16年間、能登国は越中に併合されており、須恵器編年上では細分化が未確立のため区分できないが、両窯の操業期間もこの時期に含まれる可能性をもつ。このとき、羽咋郡と砺波郡は同国中にあり、宝達山系を隔て隣郡にある。荘園開発の早暁期に窯業生産の先進地域から技術を取り入れたのではないだろうか。加えて想像を逞しくすれば、利波臣を祖とする「越中石黒系図[i]」に記載のない志留志は本宗家でなく傍流の系統であることから、利波臣の本貫地に近い小矢部川左岸域の窯跡群を飛び越えて扇状地東部に羽咋郡から窯業生産技術もしくは工人を招聘した、という背景が浮かぶ。郡界を超えて辣腕を振るうのは、在野にあって中央権力と結託した志留志にとっては容易な業であったろう。安川天皇窯の位置が天平宝字3年（759）の伊加流伎荘開田地図の南端にある「利波臣志留志地」に近いことが示唆的に思えてならない。砺波郡東部に扇央部を越えてスポット的に安川天皇窯が存在すること、砺波郡の入り口である砺波の関比定地周辺の窯に能登地域との関係性が見出せないこと、そして周辺の集落遺跡などに能登地域との近縁性を示す遺構や遺物が見られないというマイナス要素が多いことを断っておく。

i　石黒治男氏の所蔵。

窯業生産と耕地開発　安川天皇窯を含む福山支群の麓には、井山荘の比定地（現在の安川・徳万・頼成周辺）がある。井山荘の成立期は、神護景雲元年（767）11月16日付けの伊加留伎村（伊加流伎村）開田地図の端には「南同（東大寺）寺墾田地井山村」との記載があることからこの時期には墾田地化されていたが、天平宝字3年（759）の伊加流伎荘開田地図の南端に「利波臣志留志地」とあるので、ある程度の開墾はすでに着手されていた可能性が高い。安川天皇窯の操業期は、田嶋編年Ⅳ1期前半つまり、8世紀中葉にある。梅檀野窯跡群中では、宮森窯と同じ古段階の窯であり、井山荘が利波臣志留志地であった頃に操業していたという見方も可能である。

福山窯にみるような器種構成や法量分化が進んでいない安川天皇窯の製品は、内容的に貧弱であり一般的な集落もしくはそのような器種構成で充分事足りる階層への供給のための、言わば一時的（短期的）な窯であったように思われる。宇野隆夫氏は、8世紀末～9世紀の大規模な荘園遺跡の形成について、「8世紀中頃のごく小規模な拠点形成を端緒として始まるものが少なくない」とし、「民衆の経営拠点型の遺跡は、それまで利用されていなかった低湿地・扇状地・丘陵上などに立地することが多く、従来よりも緻密な土地利用を生んだ」との考えを示されている[ii]。石粟荘の北域に荘所・経営拠点的遺跡と考えられる高岡市常国遺跡がある。ほぼ正方位の平面積約118㎡と約106㎡の2棟の廂付き大型掘立柱建物と2棟の小型付属棟、井戸（横板井籠組か）が検出されており[iii]、8世紀後半の年代を与える。古代の掘立柱建物の規模を考えた場合、平面積100㎡を超えるものとして地方官衙の官舎もしくは居宅建物の可能性が高い[iv]。また、柱掘りかたの平面形状が隅丸長方形を呈し、太く長い柱が使われたことが推察される。常国遺跡は荘園経営の拠点的集落の中心部と考えられ、8世紀中頃の小規模な拠点集落から後続する経営拠点集落に相当するのではないだろうか。東大寺領荘園から荘村、梅檀野窯跡群を含む砺波平野東部は、まさに宇野氏のいう「民衆の経営拠点型遺跡」の立地するモデルに適合し、墾田をはじめ窯業生産や鉄生産といった山野資源開発を推進したことが推察できる。安川天皇窯は、このような社会的背景の中、律令的土器生産確立期の初現にあって荘園開発の契機となった、拠点的な小規模集落に製品を供給するために成立した窯と現段階では性格付けしたい。　（野原）

ii　宇野隆夫 2001「Ⅱ章1荘所と各種経営拠点の型」『荘園の考古学』青木書店

iii　高岡市教育委員会 1993『常国住宅団地内遺跡 現地説明会資料』

iv　山中敏史 2003「Ⅶ-2 官衙建物の規模」『古代の官衙遺跡―Ⅰ遺構編―』奈良文化財研究所